

桐生悠々

井上靖

中谷宇吉郎

西田 幾多郎

鈴木大拙

金沢大学創基百五十年記念事業関連企画
平成二十二年度 金沢大学資料館特別展

前身校の先達たち ～四高と医科大の10人～

岡本肇

久留勝

高安右人

中野重治

木村榮

金沢大学資料館



ごあいさつ

金沢大学は、2012年に、その最も古い源流である加賀藩種痘所の設立から数えて150年になります。現在、それに向けて「創基150年事業」が展開されていますが、本金沢大学資料館でも、昨年から定例の特別展をこの事業の関連行事とし、本学の歴史を遡っていくことにしました。昨年は「彰往察来」と題して城内キャンパスの時代を取り上げたので、今年の第2弾は、金沢大学の前身校の時代を取り上げることにしたのですが、企画を練るにつれ、私たちが思っている以上に本学の学生・教職員自体が前身校の著名な人々のことを知らないという事実が気がつきました。そこで、まずは前身校出身の著名な方々を学内外の人たちに知ってもらうこと、ついでその方々に代表させて前身校の時代を描き出し、その時代がどのようなものであったかを理解してもらうこと、さらに学内の人たちには、そうした方々の息吹に少しでも触れてその業績に思いを馳せ、それを大学構成員としての誇りに結び付けていってもらうこと、を意図した特別展を企画することにしました。

人選に当たっては、展示室の規模などを勘案して、前身校のうちでも多くの人材を輩出した第四高等学校と官立金沢医科大の卒業生・教員のなかから10名としました。ちょうど『金沢大学創基150年史』の編纂が進んでいましたので、そこで紹介候補に挙がった人々のなかから選ばせていただくこととし、『150年史』との連携も取ることにしました。(ただし、最終的には紙数の関係があり、本特別展で取り上げられた方でも『150年史』には載らない方が出るようです。)その結果、四高からは一般的にも非常に著名な西田幾多郎、鈴木大拙、井上靖、中野重治、桐生悠々、木村榮、中谷宇吉郎の7名、医科大からは学界に大きな功績を残した高安右人、岡本肇、久留勝の3名を取り上げての特別展「前身校の先達たち～四高と医科大の10人～」となりました。

まだまだ多くの人々が前身校から育っています。なかには非常に著名な人もいますし、大きな業績をあげながら一般にはあまり知られていない人もいます。資料館ではそうした人々をこれからも順次取り上げていきたいと思っています。今後の続編企画にもご期待ください。最後に、本展示には金沢周辺の多くの博物館・資料館及び関係者の方々のご協力を得ました。ここに感謝申し上げます。

金沢大学資料館長 古畑 徹

目次

ごあいさつ

第四高等学校略史～校風を中心に～ p 1

西田幾多郎と鈴木大拙 p 2

四高出身の文学者・ジャーナリスト～井上靖・中野重治・桐生悠々～ p 3

木村榮：世界を驚かしたZ項の発見 p 4

中谷宇吉郎：雪と氷のバイオニア p 5

西田・鈴木・井上・中野・桐生・木村・中谷 略年譜 p 6

官立金沢医科大学略史 p 8

戦前の光輝く研究～高安右人・岡本肇・久留勝～ p 9

高安・岡本・久留 略年譜 p10

「前身校の先達たち」関連の記念館・記念物 p11

出品目録 p12

※本パンフの執筆は、西田・鈴木を人文学類の森雅秀教授、木村・中谷を自然システム学類の荒井章司教授、それ以外を資料館長・古畑が担当しました。また、高安・岡本・久留については医学類の井関尚一教授の助言を受けました。

表紙写真の提供元

第四高等学校正面・金沢医科大学正面(本資料館蔵)、西田幾多郎・鈴木大拙・木村榮肖像(金沢ふるさと偉人館提供)、井上靖・中野重治肖像(石川近代文学館提供)、桐生悠々・中谷宇吉郎・高安右人肖像(ウィキペディア・コモンズより転載)、岡本肇肖像(金沢大学がん研究所提供)、久留勝肖像(金沢大学附属病院心肺総合外科提供)

第四高等学校略史 ～校風を中心に～

金沢大学の前身として最も有名な旧制第四高等学校の歴史は、1887(明治20)年の第四高等中学校の金沢設置に始まる。前年公布の「中学校令」で全国に5つの高等中学校の設置が定められると、石川県は官民を挙げて熱心な誘致運動を行った。金沢設置はその成果である。校舎はそれまでの県の最高学府であった石川県専門学校を借り、教員の多くもここから移り、また生徒の97%までがここから入試に応じて合格した者であった。石川県専門学校と第四高等中学校の間には厳密な意味での制度的な系譜関係はないが、実質的な継承関係が存在する。ただ、校長には鹿児島人の柏田盛文が抜擢され、薩摩風が持ち込まれたため、石川県の人間との間に少なからざる確執があった。西田幾多郎の中退がこれに関係することはつとに有名だが、それ以外にもこの時期に中退者が多いのはこうした事情が少なからず関係しているものと推察される。

1894(明治27)年、「高等学校令」により第四高等学校と改称したが、内部葛藤は依然解消していなかった。これを大きく変えたのが五代校長・北條時敬(在任：1898.2～1902.5)である。北條は金沢出身で、県専門学校・第四高等中学校の教官も勤めたことがあり、当時、西田を始め多くの生徒から慕われていた。彼によって改革が断行され、四高の特色とされる「三々塾」などの公認下宿(塾)の制度も始められた。北條の転任後も生徒自身による校風確立運動が展開され、明治40年前後に四高の校風を代表する「超然主義」が誕生した。三高(のち八高)との対抗戦に向かう「南下軍」もこの時期に登場する。こうした流れを受けて、第七代校長・溝渕進馬(在任：1911.8～1921.11)の時代に四高は最盛期を迎え、精神と身体鍛練を重視する彼の教育は運動部の活躍を促した。中谷宇吉郎が弓道部で活躍するのはこの時代の最後の頃である。1920年代に入ると、時流に媚びない「超然」の思想は膨張主義への批判という傾向をもつようになり、社会科学研究会を中心に社会主義的色彩を帯びた学生運動が盛んになる。中野重治の『北辰会雑誌』での文芸活動の背後にはこうした時代の雰囲気が存在する。1930年代になると、ファッショ化の流れの中で学生運動は弾圧されていき、四高の軍事化も進んだが、自治の校風と相容れず、学校当局と学生との間で多くの対立事件が起こった。戦後は、「民主化」政策を背景とする新教育制度のもと、1949(昭和24)年、新制金沢大学に包摂されることになった。

略年表

1887(明治20)	第四高等中学校創立
1893(明治26)	広坂通り・仙石町に新校舎完成(石川四高記念文化交流館として一部現存)
1894(明治27)	高等学校令により第四高等学校と改称
1900(明治33)	三々塾設置(公認下宿の最初)
1906(明治39)	南寮の火事、超然主義誕生
1907(明治40)	第2回南下軍遠征、「南下軍の歌」制作
1914(大正3)	第1回高専柔道大会で優勝(以後7連覇)
1921(大正10)	学年暦を変更し、4月1日始業とする
1928(昭和3)	同盟休校事件(以後、思想弾圧が厳しくなる)
1934(昭和9)	野外軍事演習拒否事件
1940(昭和15)	北辰会を北辰報国団に改編
1941(昭和16)	漕艇部遭難事件(琵琶湖で部員・OB計11名死亡)
1945(昭和20)	授業停止(4月)、学校再開(9月)
1949(昭和24)	新制金沢大学の設置によって同大学に包摂され、「金沢大学第四高等学校」と改称
1950(昭和25)	最後の卒業式。閉校。



明治村に保存されている四高無声堂(柔道・剣道・弓道場)
(個人撮影)



明治村に保存されている四高物理化学教室
(個人撮影)



「西田幾多郎」 と「鈴木大拙」

四高を代表する人物は誰かと言われれば、おそらく多くの人が西田幾多郎をあげるでしょう。明治以降の日本における代表的な哲学者で、京都学派の創始者として知られ、その影響力は現代にまで及んでいます。主著『善の研究』は四高のみならず、多くの旧制高校の学生たちの必読の書でした。

西田は1870(明治3)年に宇ノ気村(現・かほく市)生まれ、石川県師範学校、石川県専門学校予科へと進みました。そして1887年に、石川県専門学校が第四高等中学校(四高の前身)へと改められたため、その予科1年となります。1890年に帝国大学(当時は帝国大学は東京のみで、東京という名称は付されない)に進むまで同校に在籍しました。

第四高等中学校予科では鈴木大拙が同級生として席を並べ、一級上の本科には後に京都帝国大学文科大学長となる松本文三郎がいます。松本は明治期の仏教学者として著名な人物で、金沢にはすぐれた思想家や仏教学者を生み出す土壌があったことがわかります。

西田がふたたび四高と関わりを持つのは、1899年に四高の教授に任じられたときです。倫理学、論理学、心理学、独語、英語などを担当しました。その後、1909年に学習院大学に転じ、さらに京都帝国大学で教鞭を執るようになったことは周知の通りですが、『善の研究』は、10年に及ぶ四高教授時代の思索の成果であったと述懐しています。

鈴木大拙は西田と同年の金沢生まれ。第四高等中学校予科を1年で中退し、東京で学びますが、その行動力を発揮するのは1897年にアメリカに渡ってからです。東洋学関係の出版に携わりながら、みずから禅や大乘仏教についての著作を英語で発表します。帰国後は大谷大学教授に任じられ、東方仏教徒教会を創始し、禅を中心とした日本の思想や文化を海外に発信し続けました。没後は鈴木学術財団が設立され、わが国のインド学仏教学の発展に大きく寄与してきました。世界的に見て、日本の仏教学者として最も著名であるのが大拙と言っても過言ではないでしょう。



旧制高校生のバイブルといわれた西田幾多郎『善の研究』の初版本(1911)



鈴木大拙が博士号を取った『Studies in the Lankavatara sutra (楞伽經の研究)』(1930)

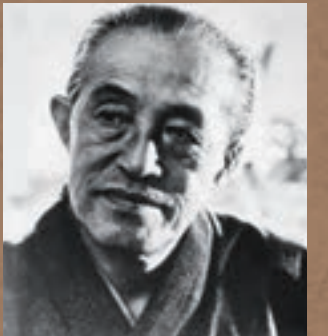
四高出身の文学者・ジャーナリスト ～井上靖・中野重治・桐生悠々～

四高出身の著名人を見ていくと、政財界で活躍した人物以上に文学界・言論界で活躍した人物が目につく。これは金沢の風土や世俗と一線を画す「超然主義」という四高の校風が関係するのかもしれない。小説家としては、金沢三文豪の一人徳田秋声(1872-1943)、直木賞を受賞した杉森久秀(1912-97)・高橋治(1929-)などがあるが、その知名度においては井上靖の右に出る者はいないであろう。

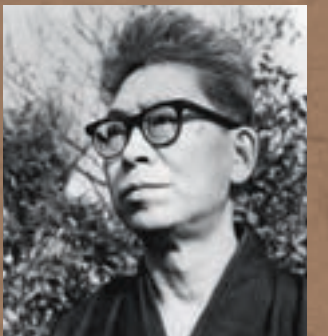
井上靖(1907-1991)は1930(昭和5)年に四高理科甲類卒業。京都帝国大学文学部卒業後、毎日新聞大阪本社に入社、1950年には『闘牛』で芥川賞を受賞。自伝的な作品、歴史小説、西域を舞台にした小説などその作品は多彩で、映画化・ドラマ化されたものも多い。外国語にも翻訳され、ノーベル文学賞候補となった時期もある。1976年文化勲章受章。四高時代は柔道に明け暮れたことも有名で、『しろばんば』『夏草冬濤』につづく自伝的小説『北の海』では当時の四高柔道部の様子が生き生きと描き出されている。作家活動ばかりでなく、中国との文化交流や平和活動でも知られる。

作家という枠を超えて活動し、多くの人々に影響を与えたという点では、中野重治(1902-79)が群を抜くであろう。中野は1919(大正8)年に四高に入学すると、同人誌などに作品を発表し始め、また『北辰会雑誌』の編集にかかわり、その最も充実した時代を作りだした。一方、社会運動にも関心を抱き四高社会科学研究会の前身である社会思想研究会の当初メンバーにも名を連ねた。東大進学後にはプロレタリア文学運動に参加して活躍したが、特高によって検挙され、転向を条件に釈放された。戦後は日本共産党に再入党し参議院議員も務めたが、党中央部と対立して党を離れている。小説・詩・短歌・評論など作品は多彩で、代表作の一つである『歌のわかれ』は四高時代を題材とし、地方の旧制高校を描いた名作として知られる。彼の魅力は、没後30年にもなろうというのに今なおその伝記研究がさかんに行われている点からもよくわかる。

ジャーナリズムの道に進んだ者としては、大阪読売社会部長からフリーになった黒田清(1931-2000)が有名だが、その大先輩である桐生悠々(1873-1941)を忘れてはいけない。桐生は1888(明治21)年に第四高等中学校に入学。同期の徳田秋声とともに小説家を目指したが、挫折。帝国大学卒業後、ジャーナリズムの道に進み、信濃毎日新聞・新愛知新聞などの主筆として活躍した。反権力・反軍部の言論を展開し、1933年の「関東防空大演習を嗤う」はその鋭い軍部批判と12年後の惨状を予言したことで特に有名だが、これにより信濃毎日新聞を追われ、その後は個人雑誌『他山の石』を刊行し、死ぬまでその抵抗の姿勢を貫いた。



井上 靖



中野 重治



桐生 悠々



木村 榮 「世界を驚かしたZ項の発見」

木村榮(きむら・ひさし)は、1870(明治3)年、今の金沢市泉野町の篠木(ささぎ)家に生まれ、1歳で木村民衛の養子となりました。養父は木村塾という私塾を開き近所の子供たちに文字やそろばんを教えていました。木村は幼い頃から英才ぶりを発揮し、8歳の頃には木村塾の小先生と呼ばれる程であったそうです。石川県専門学校を経て1887(明治20)年に飛級で第四高等中学校に入学し、1889年帝国大学理科大学星学科に入学しました。1892年には帝国大学大学院に進み天文学の研究を続けました。1899(明治32)年より1942(昭和17)年まで岩手県水沢の緯度観測所の所長を勤め、1943年に73歳で死去しました。

1899年に始まった国際緯度観測事業により、世界各地の6カ所で地球の緯度を精密に計ることになりました。その1カ所として我が国では岩手県の水沢(現在の奥州市)に臨時緯度観測所が設置されました。その所長として新進気鋭の木村榮が抜擢されたのです。この事業は、極運動(固体地球に対して自転軸が変動する現象)を、緯度の変動を精密に計ることにより詳しく調べようとしたものです。木村は精力的に観測を行い、ドイツの中央局にデータを送りましたが、諸外国のものに比べ精度が低いとの評価を受けました。当時、極運動はXとYという時間の関数である2つの項により表されていましたが、木村の観測が精密だったがゆえに従来の公式で予想される値から系統的にずれる観測値を得ていたのが原因だったのです。木村は第3の項Z(緯度によらない)を公式に付け加えることを提唱し、1902年に発表されました。これが世界に受け入れられ、木村の観測値が逆に最も精密であったことが明らかになりました。このZ項(木村項とも呼ばれる)の発見は世界を驚かせ、近代日本の科学技術の高さを世界に示したものとして高く評価されます。

木村の緯度観測技術は高く評価され、水沢の緯度観測所は1922年から36年まで国際緯度観測事業の中央局となりました。Z項の発見という世界的な業績により、1911(明治44)年に第1回の学士院恩賜賞、1938(昭和13)年には第1回の文化勲章を受章しました。1936年には英国王立天文学会からゴールド・メダルを贈られています。

木村は長年の間水沢で観測所長として活躍しました。その間、テニス、謡曲、麻雀などの娯楽を水沢に「持ち込み」、地元の人々と積極的に交流しました。かの宮沢賢治も木村がテニスに興じる姿を目にしたようで、「木村博士」の名前で原稿(「風の又三郎・初稿 風野又三郎」)に登場します。趣味の「謡曲」は金沢で身につけたものなのでしょうか。



木村榮肖像画、木村榮の学士院賞受賞を記念し、四高が田辺室に調製したもの。
(金沢大学自然科学研究科蔵)



中谷 宇吉郎 「雪と氷の科学のパイオニア」

中谷宇吉郎は、1900(明治33)年、今の石川県加賀市片山津温泉に生まれました。旧制小松中学校を経て、1919(大正8)年第四高等学校理科甲類に入学し、1922年に卒業し、同年東京帝国大学理学部物理学科へ入学しました。大学で寺田寅彦に師事し、1925年に東京帝大を卒業後は寺田寅彦の助手として理化学研究所に勤務しました。ロンドン留学を経て、1930(昭和5)年に助教授として北海道帝国大学に新設された理学部に助教授として赴任しました。1962(昭和37)年に癌により61歳で死去しています。北大では理学部物理学科、地球物理学科および低温科学研究所に在籍し活躍しました。

中谷宇吉郎と言えば雪や氷の研究で有名ですが、北大着任までは当時長波長X線の研究等で有名な新進気鋭の実験物理学者でした。着任後しばらくは火花放電の研究を行い、1934年にはNature誌にウィルソン霧箱の火花放電実験の論文を発表しています。中谷は北大に着任後、札幌の地が当時余りに僻遠で原子物理学の実験装置の材料の入手にも苦労するのをかこち、風土に合った科学を目指し、雪の研究に転じたそうです。きっかけは外国人の文献で美しい雪の結晶の写真を見て、自然の造形美に感動したことだったようです。

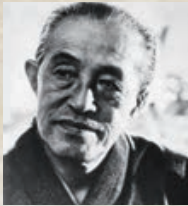
中谷はまず、雪の結晶の観察から始め、十勝岳の山小屋で3千枚もの顕微鏡写真を撮って分類し、次にその結晶形の再現(すなわち人工雪の生成)実験に移行しました。1936(昭和11)年に弟子の協力のもとに初めての人工雪を作ることに成功しました。そして、雪の結晶形と物理条件(気温、飽和度など)の関係を明らかにすることに成功し、1941年には「雪の結晶の研究」により帝国学士院賞を授与されています。その後、中谷の研究活動は雪や氷に関する様々な領域に広がりを見せます。戦時中には航空機への着氷や千島や北海道の霧の発生などの研究も行い、鉄道などに被害をもたらす凍上を防止することにも成功しました。農業物理にも目を向け、洪水被害の調査、山岳地域での積雪の水源としての重要性にも言及し大雪山に積もる雪の総量を測定しました。晩年はグリーンランドの調査にも赴き、雪と氷の物性に関する観察および実験を行いました。中谷は、「雪の結晶は、天から送られた手紙である…」という言葉で有名な『雪』を初めとする多くの著作を世に出した優れた啓蒙家でした。彼が科学の重要性、面白さを社会に伝えた功績も高く評価されるでしょう。

中谷の研究論文(例えば、Jour. Colloid Sci.に1954年に発表された「氷表面の水の薄層」に関するもの)はごく最近にいたっても引用されており(Scopusによる)、中谷の成果が今なお「現役」であることを示しています。彼の雪への関心は、活躍の地であった北海道のみならず、生まれ育った北陸石川県の風土の影響によるものではないでしょうか。積雪の水源としての重要性などは北陸の人が常にかけていることですから。



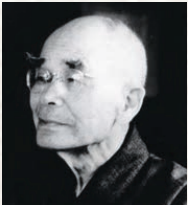
西田 幾多郎 ーにしだ・きたろうー

略年譜	
1870(明治3)年	石川県河北郡森村(現・石川県かほく市)に生まれる
1883(明治16)年	石川県師範学校入学(1884卒業)
1886(明治19)年	石川県専門学校入学
1887(明治20)年	第四高等学校予科に編入学(1888本科進学)
1890(明治23)年	第四高等学校中退
1891(明治24)年	帝国大学文科大学哲学科選科に入学(1894修了)
1895(明治28)年	石川県尋常中学校七尾分校主任となる
1896(明治29)年	第四高等学校講師嘱託となる
1897(明治30)年	山口高等学校教務嘱託となる(1899教授昇任)
1899(明治32)年	第四高等学校教授に転任
1900(明治33)年	三々塾を作り、学生指導に当たる
1909(明治42)年	学習院教授に転出
1910(明治43)年	京都帝国大学文科大学助教授となる
1911(明治44)年	『善の研究』出版
1913(大正2)年	京都帝国大学文科大学教授
1927(昭和2)年	帝国学士院会員。『働くものから見るものへ』出版
1928(昭和3)年	京都帝国大学停年退官(1929名誉教授となる)
1940(昭和15)年	文化勲章受章
1945(昭和20)年	逝去



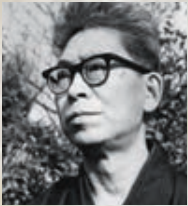
井上 靖 ーいのうえ・やすしー

略年譜	
1907(明治40)年	北海道旭川町(現・旭川市)に生まれる
1912(明治45)年	両親と離れ母の郷里・湯ヶ島で祖母に育てられる
1921(大正10)年	県立浜松中学(現・浜松北高校)入学。 翌年、県立沼津中学(現・沼津東高校)転入
1927(昭和2)年	第四高等学校理科甲類入学。柔道部に入る。
1929(昭和4)年	柔道部主将となるも、部の混乱の責任を取って退部。 同人誌に詩を投稿し始める
1930(昭和5)年	第四高等学校卒業。 九州帝国大学法文学部に入学するも中退。
1932(昭和7)年	京都帝国大学文学部入学
1936(昭和11)年	京都帝大卒業。大阪毎日新聞社入社、学芸部配属
1937(昭和12)年	日中戦争勃発により応召されるも、 病により翌年除隊。
1950(昭和25)年	「闘牛」により第22回芥川賞受賞
1951(昭和26)年	毎日新聞社退社。作家生活に入る
1958(昭和33)年	『天平の甕』で芸術選奨文部大臣賞受賞、翌年『氷壁』で 芸術院賞、翌翌年『敦煌』『楼蘭』で毎日芸術賞
1961(昭和36)年	『淀どの日記』で野間文芸賞、1989年にも『孔子』で 同賞再受賞
1964(昭和39)年	日本芸術院会員
1969(昭和44)年	『おろしや国酔夢譚』で日本文芸大賞、1982年にも 『本覚坊遺文』で同賞再受賞
1976(昭和51)年	文化勲章受章
1982(昭和57)年	世界平和アピール七人委員会の委員を務める (逝去まで)
1991(平成3)年	逝去



鈴木 大拙 ーすずき・だいせつー

略年譜	
1870(明治3)年	石川県金沢市の本多町に生まれる。本名、貞太郎。
1882(明治15)年	石川県専門学校入学
1887(明治20)年	第四高等学校予科に編入学
1888(明治21)年	第四高等学校予科中退。 石川県珠洲郡飯田小学校の助手となる。
1889(明治22)年	石川県美川小学校教諭に転任
1891(明治24)年	上京し東京専門学校(現・早稲田大学)入学、 4カ月後退学。円覚寺に参禅。
1892(明治25)年	帝国大学哲学科選科に入学(1895中退)
1894(明治27)年	円覚寺の釋宗演より「大拙」の居士号を受ける
1897(明治30)年	釋宗演の推薦で哲学者ポール・ケーラスの 助手として渡米。
1900(明治33)年	英訳『大乘起信論』出版
1907(明治40)年	『大乘仏教概論』(英文)をロンドンで出版。 翌年、シカゴで出版。
1909(明治42)年	帰国。学習院及び東京帝国大学講師となる。
1910(明治43)年	学習院教授(～1920)
1910(明治44)年	アメリカで知り合ったビアトリス・レーンと結婚
1921(大正10)年	大谷大学教授(～1960)
1930(昭和5)年	英文『楞伽經の研究』で博士号
1939(昭和14)年	『禅と日本文化』出版。妻ビアトリス逝去。
1941(昭和16)年	鎌倉東慶寺に「松ヶ丘文庫」の建設を始める
1949(昭和24)年	日本学士院会員。文化勲章受章
1966(昭和41)年	逝去



中野 重治 ーなかの・しげはるー

略年譜	
1902(明治35)年	福井県坂井郡高棕村(現・福井県坂井市)に生まれる
1914(大正3)年	県立福井中学(現・藤島高校)入学
1919(大正8)年	第四高等学校文科乙類入学
1920(大正9)年	『北辰会雑誌』第88号に作品発表。雑誌部員となり、 以後卒業まで、『北辰会雑誌』の編集に携わる
1924(大正13)年	第四高等学校卒業。東京帝国大学独逸文学科入学
1926(大正15)年	林房雄らとマルクス主義芸術研究会を設立。 堀辰雄らと同人誌『驢馬』創刊。 日本プロレタリア芸術連盟に参加し、中央委員。
1928(昭和3)年	全日本無産者芸術団体協議会(略称ナップ)の 結成に参加。
1931(昭和6)年	ナップ解散。日本プロレタリア文化聯盟 (略称コップ)結成、中央協議員になる
1932(昭和7)年	コップ弾圧。 治安維持法違反容疑で特別高等警察に検挙
1934(昭和9)年	共産主義運動から身を引くことを条件に出獄
1937(昭和12)年	宮本百合子らとともに内務省警保局より 執筆禁止処分。翌年緩み、再び文章を発表
1940(昭和15)年	『歌のわかれ』出版
1941(昭和16)年	『斎藤茂吉ノオト』出版
1945(昭和20)年	日本共産党に再入党。新日本文学会創立に参加
1947(昭和22)年	参議院議員(全国区、～1950)
1955(昭和30)年	『むらぎも』で毎日出版文化賞
1964(昭和39)年	日本共産党除名
1978(昭和53)年	朝日賞受賞
1979(昭和54)年	逝去



桐生 悠々 ーきりゅう・ゆうゆうー

略年譜	
1873(明治6)年	石川県金沢市の高岡町に生まれる。本名、政次
1888(明治21)年	第四高等学校入学(1891本科進学)
1892(明治25)年	第四高等学校を中退し徳田秋声と上京。翌年復学
1895(明治28)年	第四高等学校(前年改称)卒業。 帝国大学法科大学政治学科入学
1899(明治32)年	東京帝国大学(1987改称)卒業
1902(明治35)年	下野新聞入社、主筆となる。翌年、退社
1903(明治36)年	大阪毎日新聞社入社
1907(明治40)年	大阪朝日新聞社入社
1910(明治43)年	信濃毎日新聞入社、主筆となる
1914(大正3)年	政友会批判で信濃毎日退社。 新愛知新聞社入社、主筆となる
1919(大正8)年	『有らゆる物の書換』出版
1924(大正13)年	新愛知退社。総選挙に立候補するも惨敗
1928(昭和3)年	再び信濃毎日新聞主筆となる
1933(昭和8)年	「関東防空大演習を嗤う」を発表して問題化し、 信濃毎日退社
1934(昭和9)年	個人雑誌『他山の石』発刊。以後、軍部等を批判し 何度も発禁処分を受ける
1941(昭和16)年	逝去



中谷 宇吉郎 ーなかや・うきちろうー

略年譜	
1900(明治33)年	石川県作見村片山津(現・加賀市片山津温泉)に生まれる
1913(大正2)年	県立小松中学(現・小松高校)入学
1919(大正8)年	第四高等学校理科甲類入学
1922(大正11)年	東京帝国大学理学部物理学科入学
1925(大正14)年	東京帝国大学卒業、 理化学研究所寺田研究室助手となる
1928(昭和3)年	英国留学(～1930)
1930(昭和5)年	新設の北海道帝国大学理学部に助教授として赴任
1936(昭和11)年	世界で初めて人工雪を作ることに成功
1938(昭和13)年	最初の随筆集『冬の華』刊行
1939(昭和14)年	製作指導をした東宝文化映画『雪の結晶』完成
1941(昭和16)年	「雪の結晶の研究」により帝国学士院賞受賞
1948(昭和23)年	科学映画「霜の花」完成、朝日文化賞受賞
1949(昭和24)年	岩波映画製作所の前身となる 「中谷研究室」プロダクションが東京で発足
1962(昭和35)年	逝去



木村 榮 ーきむら・ひさしー

略年譜	
1870(明治3)年	石川県河北郡泉野村(現・金沢市泉野町)の 篠木家に生まれる
1871(明治4)年	木村民衛の養子となる
1881(明治14)年	石川県専門学校入学
1887(明治20)年	第四高等学校本科入学
1889(明治22)年	第四高等学校卒業(卒業証書第1号)。 帝国大学理科大学星学科入学
1892(明治25)年	帝国大学大学院進学
1899(明治32)年	水沢臨時緯度観測所設置。所長に任命される(～1942)
1902(明治35)年	乙項発見
1911(明治44)年	第1回帝国学士院恩賜賞受賞
1918(大正7)年	国際天文学連合(IAU)と 国際測地学地球物理学連合(IUGG)の緯度変化委員長
1922(大正11)年	水沢緯度観測所が 国際緯度観測事業中央局となる(～1936)
1925(大正14)年	帝国学士院会員
1936(昭和11)年	英国王立天文学会よりゴールドメダルが贈られる
1938(昭和13)年	第1回文化勲章受章
1943(昭和18)年	逝去



官立金沢医科大学略史

金沢大学の前身校で最も古い歴史を持つのが、旧制の官立金沢医科大学である。その始まりは1862(文久2)年の加賀藩による種痘所の設立にまで遡る。その棟取となった蘭方医・黒川良安は、藩主前田慶寧が1867(慶応3)年に卯辰山に養生所を開設すると、そこでも棟取となり、翌年、より本格的な医学校・病院の設立を考えた藩主慶寧の命で長崎に赴き、それらの制度調査に当たった。こうした黒川らの尽力により1870(明治3)年、大手町の旧津田玄蕃邸に医学館と病院が開設され、本格的な医学教育がスタートする。翌年、オランダ人軍医スロイスが来任し、また廃藩置県で旧藩主前田慶寧が藩知事を免ぜられると、黒川は職を辞すが、彼が金沢における医学教育の基礎を築いたことは間違いなく、それゆえに本学医学類の学祖とされるのである。

その後、医学館は金沢病院に改名されて県立となり、1876(明治9)年、医学教育部門を分離して石川医学所ができた。これはさらに金沢医学校に改名され、1884年には甲種医学校に昇格した。その後政府は、各県の医学校を廃止して、拠点に官立の高等学校医学部を置いて医学教育を集積する方針を立てた。金沢は千葉・仙台・岡山・長崎とともにその拠点に選ばれ、1886年第四高等学校医学部が置かれ、1892年には第四高等学校医学部と改称された。校舎は当初、金沢甲種医学校のそれが使われ、学生も移行しており、事実上四高医学部は金沢甲種医学校を継承するものであった。1901年、制度改革で四高医学部は独立して金沢医学専門学校となり、ついて臨床講義と実習の場であった県立金沢病院が小立野に移転すると、医専も小立野に移転する。さらに1923(大正12)年、千葉・長崎とともに官立医科大学に昇格した。この制度変遷の時代に校長・学長などとして学校の舵取りに当たったのが高安右人であり、いま医学類玄関前には胸像が置かれている。

官立金沢医科大学は戦前・戦中・戦後を通して、地域医療の中核となる多くの人材を輩出するとともに、優秀な教授陣を擁して研究業績をあげていった。代表的な研究者としては学士院賞を受けた岡本肇・久留勝らがいる。こうした研究業績に、戦時体制下における科学動員の方針が加わり、1941(昭和16)年には附属結核研究施設が設置された。これは翌年研究所に昇格する。これが本学がん研究所の前身である。1949年、新制金沢大学に包摂され、医学部となった。

略年表

1862(文久2)年	加賀藩、金沢彦三八番丁に種痘所を設置
1867(慶応3)年	加賀藩、卯辰山に養生所を開設
1870(明治3)年	大手町の旧津田玄蕃邸に金沢医学館と病院を開設(建物は兼六園内に移設し現存)。のち医学館は県立の金沢病院に改称
1876(明治8)年	金沢病院の医教育部門を分離して医学所とする。
1879(明治12)年	医学所を金沢医学校に改称。のち石川県甲種医学校に昇格
1887(明治20)年	第四高等学校医学部設置。石川県甲種医学校はこれに継承され、翌年廃止
1894(明治27)年	第四高等学校医学部と改称
1901(明治34)年	四高医学部が独立し、金沢医学専門学校となる
1912(明治45)年	小立野の県立金沢病院(のち官立に移管され附属病院となる)横に新校舎が竣工し、移転
1923(大正12)年	金沢医専が金沢医科大学に昇格
1939(昭和14)年	臨時附属医学専門学校を設置(1952廃止)
1942(昭和17)年	結核研究所(のちのがん研究所)を設置
1949(昭和24)年	新制金沢大学の設置により同大学医学部となる(医科大廃止は1960)



旧津田玄蕃邸に置かれた金沢医学専門学校
(明治43年金沢医学専門学校卒業アルバムより)



金沢医科大学須藤憲三教授(当時学長)の講義風景
(大正14年金沢医科大学卒業アルバムより)

戦前の光り輝く研究 ～高安右人・岡本肇・久留勝～

高安 右人 (たかやすみきと, 1860-1938)

現在の佐賀県に生まれ、1887(明治20)年帝国大学医科大学(現・東京大学医学部)卒業。1888年に第四高等学校医学部の眼科医長として赴任して以後、第四高等学校医学部、金沢医学専門学校の眼科教授(1901年から校長)を経て、1923年に金沢医科大学の初代学長となり、1924年まで務めた。1908年の第12回日本眼科学会総会において、「奇異なる網膜血管の変状に就いて」の論文を発表。のちに「高安病(脈なし病)」と命名され、世界的に有名となった。高安病は、大動脈やそこから分かれる大きな血管に炎症が生じ、血管の狭窄や閉塞を起こす結果、網膜を始め、脳、心臓、腎臓などが障害を受けたり、手足が疲れやすくなる血管炎(大動脈炎症候群)で、その原因は不明である。日本人の名が冠せられた数少ない疾患のひとつである。



高安右人

岡本 肇 (おかもと はじめ, 1902-1996)

石川県小松市に生まれ、1927(昭和2)年金沢医科大学卒業。薬理学教室の助教授を経て、1941年に附設された結核研究施設の教授となり、後の結核研究所(現がん研究所)の基礎を築いた。1939年、核酸RNAによる溶血性連鎖球菌の溶血毒素(ストレプトリジンS)増産現象を発見。RNAの生物学的意義の解明に重要な知見をもたらし、「RNA効果」として国内外で高く評価された。1944年に肺炎双球菌を用いた実験で核酸が遺伝物質であることを解明したAvery博士の発見の5年も前のことである。1957年、「核酸による溶血性連鎖球菌の溶血毒増産現象の発見について」の研究で日本学士院賞を受賞した。戦後には、溶連菌による制がん研究を行い、免疫賦活能をもつがん治療薬OK-432(ピシバニール)を開発した。



岡本肇

久留 勝 (くるまさる, 1902-1970)

三重県に生まれ、1926(大正15)年東京帝国大学医学部卒業。1941年金沢医科大学第一外科学教授に就任し、本学における脳神経外科診療の土台を築いた。がん患者の疼痛除去のために神経変性をおこさせ、死後その変性線維を顕微鏡解剖学的に追究することによって、知覚系、ことに痛覚系の脊髄、延髄内伝導路の解明に大きな貢献をした。「脊髄後角内に於ける痛温度覚伝道に関する細胞群の決定に関する研究」により、1949年日本学士院賞を受賞した。臨床医家が成した純基礎医学的な業績として特筆に値する。戦後はがんの研究も行い、胃がん、乳がんにおける「前がん状態」の概念を確立した。1954年に大阪大学に転じた。



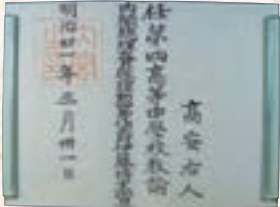
久留勝



高安 右人 —たかやす・みきと—

略年譜

1860(万延元)年 肥前国小城郡西多久村(現・佐賀県多久市)に生まれる
1887(明治20)年 帝国大学医科大学(現在の東京大学医学部)卒業
1888(明治21)年 第四高等学校医学部着任。金沢病院眼科長兼任。
1890(明治23)年 第四高等学校医学部教授
1899(明治32)年 ドイツ留学(～1901)
1901(明治34)年 四高医学部が独立して金沢医学専門学校となり、校長就任(～1923)
1903(明治36)年 金沢病院院長兼任。学位を受ける。
1908(明治41)年 第12回日本眼科学会総集會にて「奇異なる眼科網膜中心血管の変化の一例」(「高安病」の最初の報告)を発表。これを「十全会雑誌」50号に「奇異なる網膜血管の変状に就て」として発表。
1923(大正12)年 金沢医専が官立金沢医科大学となり、初代学長に就任
1924(大正13)年 退官。金沢市味噌蔵町で開業。
1934(昭和9)年 大分県別府に転居
1938(昭和13)年 逝去



高安右人が四高に着任した際の辞令(複製)
(四高同窓会蔵)



久留 勝 —くる・まさる—

略年譜

1902(明治35)年 三重県松坂市に生まれる
1926(大正15)年 東京帝国大学医学部卒業
1931(昭和6)年 欧米留学(～1933)
1933(昭和8)年 医学博士
1936(昭和11)年 財団法人癌研究会付属康楽病院外科医長
1941(昭和16)年 金沢医科大学第一外科学教室教授
1949(昭和24)年 「脊髄後角内に於ける痛温度覚伝導に関する細胞群の決定に関する研究」で日本学士院賞受賞
1953(昭和28)年 金沢大学附属病院長
1954(昭和29)年 大阪大学医学部教授に転出。第1回武田医学賞受賞。
1962(昭和37)年 国立がんセンター病院長
1967(昭和42)年 国立がんセンター総長
1970(昭和45)年 逝去



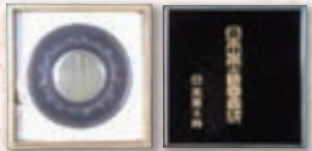
久留勝の東京帝大医学部
卒業証明書の手書きによる写し
(「退職者履歴書」[金沢大学資料館蔵]より)



岡本 肇 —おかもと・はじめ—

略年譜

1902(明治35)年 石川県小松市に生まれる
1927(昭和2)年 金沢医科大学卒業
1931(昭和6)年 金沢医科大学薬物学教室助教授
1939(昭和14)年 核酸RNAによる溶血性連鎖球菌の溶血毒素(ストレプトリジンS)増産現象を発見
1941(昭和16)年 薬物学教室に結核研究施設が付設され、教授に就任
1942(昭和17)年 金沢医科大学結核研究所が設置され教授、薬理製剤部主任
1952(昭和27)年 日本細菌学会浅川賞受賞
1954(昭和29)年 金沢大学医学部薬理学教室教授。結核研究所長兼任(～1958)
1957(昭和32)年 「核酸による溶血性連鎖球菌の溶血毒増産現象の発見について」の研究で日本学士院賞受賞
1960(昭和35)年 金沢大学医学部長(～1963)
1963(昭和38)年 金沢大学附属癌研究施設長併任(～1967)
1967(昭和42)年 金沢大学がん研究所初代所長兼任
1968(昭和43)年 停年退官。
1969(昭和44)年 富山県立中央病院長(～1974)
1994(平成6)年 逝去



岡本肇氏に贈られた日本学士院賞メダル(個人蔵)

「前身校の先達たち」関連の記念館・記念物
—「先達たち」についてもっと知りたい方のために—



① 石川県西田幾多郎
記念哲学館
かほく市／安藤忠雄設計／
2002年オープン／月曜休館



② 中谷宇吉郎雪の科学館
加賀市／磯崎新設計／
1994年オープン／水曜休館



③ 金沢ふるさと偉人館
金沢市下本多町／1993年オープン／
年末年始以外無休



④ 高安右人胸像
金沢大学医学類
正面玄関前



⑤ 石川四高記念文化交流館
(石川近代文学館)
金沢市香林坊／
2008年リニューアルオープン／
年末年始以外無休



⑥ 木村榮博士生誕の地碑
金沢市泉野町

⑦ 井上靖「北の海」文学碑
W坂下

⑧ 鈴木大拙誕生地記念碑
金沢市本多町

他県の関連する記念館

- 井上靖記念館 ————— (北海道旭川市): 生誕の地を記念して1997年オープン／月曜休館
中野重治文庫記念丸岡図書館 — (福井県坂井市): 記念文庫見学は館員に申し出る／火曜・第2木曜休館
奥州宇宙遊学館 ————— (岩手県奥州市): 旧水沢緯度観測所／2008年オープン／火曜休館
木村記念館 ————— (岩手県奥州市): 国立天文台水沢キャンパス内・旧臨時緯度観測所庁舎／
受付は奥州宇宙遊学館窓口／火曜休館

出品目録

資料名	年代	所蔵者（場所）	
四高の七人			
●明治期在学の四人			
1	木村榮肖像画(田辺至作)	1912(明治45)	金沢大学自然科学研究科
2	西田幾多郎扁額「一日不作一日不食」		金沢大学学校教育学類
3	木村榮宛西田幾多郎書簡(軸装)	1940(昭和15)	金沢ふるさと偉人館
4	西田幾多郎辞令(3点)	1896(明治29)・1899(明治32)	石川県西田幾多郎記念哲学館
5	『善の研究』初版本	1911(明治44)	金沢大学附属図書館(晩鳥文庫)
6	Outlines of Mahāyāna Buddhism(大乘仏教概論)	1908	金沢大学附属図書館(四高図書)
7	Studies in the Lankavatara sutra : one of the most important texts of Mahayana Buddhism, in which almost all its principal tenets are presented, including the teaching of Zen (楞伽經の研究)	1930	金沢大学附属図書館(晩鳥文庫)
8	鈴木大拙直筆原稿「BASIC IDEAS BUDDISM PRAJINA KARUNA」		金沢ふるさと偉人館
9	木村榮自筆ノート(複製)(3点)		金沢ふるさと偉人館
10	Results of the International Latitude service from 1922. 7 to 1931.0	1935	金沢大学附属図書館(四高図書)
11	木村記念絵葉書		金沢ふるさと偉人館
12	『有らゆる物の書換』初版本	1919(大正8)	金沢大学附属図書館
13	『他山の石』(原本)(3点)	1936(昭和11)・1938(昭和13)	石川近代文学館
14	桐生悠々遺品 蓋付き小形硯		石川近代文学館
●大正・昭和期在学の三人			
15	四高弓術部時代の中谷字吉郎写真	1920(大正9)	中谷字吉郎雪の科学館
16	弓道部優勝記念ペンダント		中谷字吉郎雪の科学館
17	『冬の華』初版本	1938(昭和13)	金沢大学附属図書館(四高図書)
18	岩波新書「雪」(第2刷)	1938(昭和13)	金沢大学附属図書館(晩鳥文庫)
19	Snow Crystals:Natural and Artificial	1954年	中谷字吉郎雪の科学館
20	自筆色紙「雪は天から送られた手紙である」(額装)		個人蔵
21	雪華園		中谷字吉郎雪の科学館
22	『北辰』157号		金沢大学附属図書館
23	色紙「北辰居其所而衆星共之―孔子―」		石川近代文学館
24	『歌のわかれ』初版本(サイン入り)	1940(昭和15)	個人蔵
25	ドイツ語版「レーニン全集」(中野重治の書き込み入り)		個人蔵
26	中野重治直筆原稿「金沢豎町山田屋小路」		石川近代文学館
27	『北辰会雑誌』96 マイヨール版	1923(大正12)	県立歴史博物館
28	第四高等学校生徒名簿(大正8年入学以降)		金沢大学資料館
29	『北の海』初版本	1975(昭和50)	石川近代文学館
30	第四高等学校学籍簿(大正15-昭和2入学、昭和2-5年卒業)		金沢大学資料館
31	井上靖直筆「本覚坊遺文」冒頭	1986(昭和61)	石川近代文学館
32	中野重治写真パネル		石川近代文学館
33	井上靖写真パネル		石川近代文学館
●四高の歩みの基本史料			
34	第四高等学校一覧		金沢大学附属図書館(特別資料室)
35	第四高等学校同窓会報		金沢大学附属図書館(特別資料室)
36	『北辰会雑誌』『北辰』		金沢大学附属図書館(特別資料室)
●明治3年の奇跡―西田・鈴木・木村の書			
37	西田幾多郎の書 掛軸(2点)		金沢ふるさと偉人館
38	鈴木大拙の書 掛軸(2点)		金沢ふるさと偉人館
39	木村榮の書 掛軸(2点)(複製)		金沢ふるさと偉人館
●中谷字吉郎の科学映画			
40	岩波映画「楽しい科学シリーズ 雪の結晶」(14分)	1958(昭和33)	中谷字吉郎雪の科学館
医科大の三人			
41	高安右人辞令(複製)	1887(明治21)	四高同窓会
42	最新眼科全書(全3巻)	1895(明治28)―1897(明治30)	金沢大学附属図書館(医学系分館)
43	金沢大学医学部創立百年の時のアルバム(タイトルなし)	1962(昭和37)	金沢大学資料館
44	岡本肇寄贈図書(10点)		金沢大学附属図書館(自然科学系図書館)
45	日本学士院賞状	1957(昭和32)	個人蔵
46	日本学士院賞メダル	1957(昭和32)	個人蔵
47	『アサヒグラフ』昭和43年3月15日号	1968(昭和43)	個人蔵
48	昭和33年度医学部卒業アルバム	1958(昭和33)	金沢大学資料館
49	昭和34年度医学部卒業アルバム	1959(昭和34)	金沢大学資料館
50	マウス実験の写真		個人蔵
51	志賀潔扁額	1950(昭和25)	金沢大学がん研究所
52	久留勝 学位証明の手書きし(複写)		金沢大学資料館
53	岡本肇宛久留勝書簡		個人蔵
54	『いたみ:その本態と対策』	1951(昭和26)	金沢大学附属図書館(医学系分館)
55	金沢病院図面		金沢大学資料館
56	『金沢医学専門学校一覧』		金沢大学附属図書館(特別資料室)
57	『金沢医科大学一覧』		金沢大学附属図書館(特別資料室)
追加			
	木村榮第四高等学校卒業証書(複製)	1889(明治22)	金沢ふるさと偉人館

協力者・協力機関(50音順、敬称略)

石川県西田幾多郎記念哲学館

石川県立歴史博物館

石川四高記念文化交流館

井関尚一

今井文子

浦城幾世

鰻目卯女

岡本 宏

岡本安雄

金沢大学がん研究所

金沢大学附属病院心肺総合外科

金沢ふるさと偉人館

中谷字吉郎雪の科学館

中谷芙二子

丸山珪一

村井昭夫



執筆者(50音順、敬称略)

荒井章司

古畑 徹

森 雅秀

主要参考文献

○金沢大学医学部百年史編集委員会編『金沢大学医学部百年史』、
金沢大学医学部創立百年記念会、1972

○金沢大学50年史編纂委員会編集『金沢大学五十年史』部局編・通史編、
金沢大学50周年記念事業後援会、1999～2001

○太田雅夫編・桐生悠々著『桐生悠々自伝:思い出るまま・他』現在ジャーナリズム出版会、1973

○『井上靖全集』新潮社、1995～2000

○『鈴木大拙全集』岩波書店、1999～2003

○『中野重治全集(定本版)』筑摩書房、1996～1998

○『中谷字吉郎集』岩波書店、2000～2001

○『西田幾多郎全集』岩波書店、2002～2009

平成二十二年度 金沢大学資料館特別展

前身校の先達たち ～四高と医科大の10人～

開催期間：平成22年10月15日(金)～11月12日(金)

編集・発行：金沢大学資料館

発行日：平成22年10月15日

印刷：能登印刷株式会社